

# 福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行  
第五福竜丸平和協会  
〒136 東京都江東区  
夢の島3-2  
都立第五福竜丸展示館内  
電話 03-3521-8494

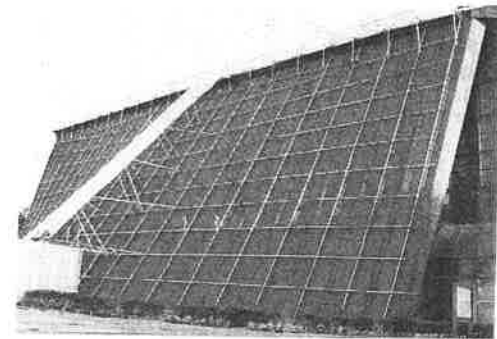
## 新年度役員・評議員を 選出、事業計画・予算 も決定

協会評議員会、理事会ひらく  
三月二十九日、東京都千代田区・  
学士会館で評議員会及び理事会が  
開催され、(財)第五福竜丸平和協会  
の寄付行為に基づき、一九九七年  
四月一日から一九九九年三月三十一  
日までの理事九名、監事二名ならび  
に評議員十八名が選出されました。  
会長、副会長には川崎昭一郎、  
本多喜美阿氏が再任されました。  
三月限りで理事を退任される  
田沼 肇、杉 重彦阿氏の長年の  
功績にたいして川崎会長より謝辞  
があり、阿氏を新たに顧問に加え  
ることが決まりました。

理事会で決定された新年度事業  
計画は、本年が、核実験の被害を  
国際的に認定した第一回、ゲウオッ  
シユ会議から四十年、第五福竜丸  
保存運動の発足から三十年に当た  
ることに注意を喚起しています。

会長、副会長以外の理事は小川  
岩雄、斎藤鶴子、猿橋勝子、服部  
学、松井康浩(以上再任)、藤田  
秀雄、山村茂雄(以上新任)、監

第五福竜丸乗組員 安藤三郎氏死去  
元第五福竜丸乗組員の安藤三郎氏が四月一日、郷里の大分県津久  
見市保土島で亡くなりました。七十一歳。



外壁全面に足場をくんでの修理工事

事は澤藤統一郎、清水幹雄阿氏再  
任、評議員は飯塚利弘、和泉伸一、  
伊東 壮、岩垂 弘、大石又七、  
落合 巖、小佐田哲男、柴田徳衛、  
庄野直美、鈴木沙雄、関屋綾子、  
藤原 弘、堀田てる子、三井 周、  
森 一久、山口勇子、山田英二、  
吉田嘉清の各氏いずれも再任。  
展示館の雨漏り修理工事終る  
年度末の三月、一カ月以上かけ  
て、第五福竜丸展示館天井の雨漏  
り修理工事が行われました。

## 憲法五〇年の年に 澤藤統一郎

私が生まれたころ、私の国は戦争をしていた。

私の父は兵卒で、母は銃後を守っていた。

私が二歳の夏、神風の吹くこともなく戦争は終わった。

私が物心ついたのはマッカーサーの君臨する国。

誰もが、戦争の悲惨と苦勞を語る時代に私は育った。

広島で小学生となり、

原爆ドームの瓦礫を遊び場とした。

町にはまだピカドンの傷跡。

顔にケロイドの担任の先生。

「太田川をさらえば屍体が出てくるぞ」

小学校の四年生、私は駿河湾を望む清水にいた。

焼津の港に原爆マグロが上がり、放射能の雨が降った。

このとき、ダイゴフクリュウマルという船の名と

クボヤマアイキチという人の名を知った。

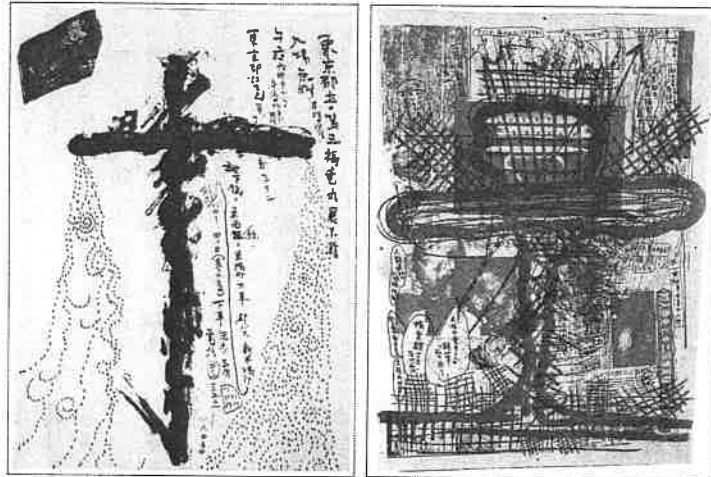
すべては、あとからだんだんとわかってきた。

戦争とピカドンとダイゴフクリュウマルは、

天井の採光ガラスのトップから  
船上に落ちる雨漏りが最近ひどく  
なり、なんとか応急修理をの願  
いがやっと実り、展示館外壁いっ  
いに足場をはり、上り階段を組み、  
天井サッシの補強、目地の取り替  
え、防水塗装などが行われたもの

## 黒田征太郎氏、第五福竜丸のオリジナルポスター寄贈

一人、黒田征太郎、山辺ひろのぶ  
両氏の共同製作による  
第五福竜丸のポスター  
がこのほど完成し、山  
辺氏が作品をかかえて  
来館、展示館に寄贈さ  
れました。



デザイン・イラスト/黒田征太郎・山辺のぶひろ(1997)

昨年十一月の「第五  
福竜丸のベン・シャ  
ー展」にさいし来館さ  
れた阿氏が、第五福竜  
丸の姿に心を動かされ、  
船尾や舵に用紙を押し  
つけるようにクレパス  
等で描かれた作畫をベ  
ースにシルクスクリー  
ンで作られたもので、B  
版全紙大の大きなポ  
スター二種類。  
大胆な構図と線や点、  
躍動する書体が、船の  
願いを鮮烈に伝えてい  
ます。

つながっていた。

私たちの国は侵略戦争を起こし、その戦争で唯一の被爆  
国民となった。そして水爆実験の最初の犠牲者を出し  
た。核の被害は過去のものではない。私たちはその危険  
と共に生きているのだ。

戦争が原爆を生み

戦争準備が水爆を育てた

戦争と核兵器が、人々に限らない悲惨をもたらし、

人類の生存さえ危うくしている。

私は時代の子、一瞬も疑ったことはない。

戦争も核兵器も絶対悪であることを。

核と人類が共存すべからざることを。

「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和  
のうちに生存する権利を有すること」を。

平和憲法と核廃絶は、私の精神の芯となっている。

第五福竜丸よ まがまがしき核の罪過の証人よ

人類の愚かさを告発するシンボルであり続けよ

核廃絶を願ひ、声をあげる人々を励まし続けよ

(第五福竜丸平和協会監事)

### 平和文化と暴力文化

藤 田 秀 雄

いま、ユネスコが取り組んでいる中心的課題は、平和文化の発展である。これが最初に提起されたのが一九八九年の会議においてである。九二年、ユネスコ委員会で討議され、九二年の総会で採択された決定にもとづいて、エル・サルバドルとモザンビークとブルンジで、平和文化プログラムの具体化をすすめることになった。

わたしが入手した、モザンビーク平和文化プログラム案によれば、独立後長い間内戦がつづいていたこの国の紛争を和解へと転じ、協同して、人間的な社会開発をすすめるのが、その目的である。このため、①戦っていた兵士を迎えられる女性(母や妻)の和解のため

の教育をおこない、②もと兵士たちに識字教育・職業教育をおこない、③平和のためのマスメディア(主にラジオ)や芸術家などの活動を通じて、ひとびとの意識と行動を変えていく。④学校では子どもたちに平和教育をおこなう。⑤女性・青年団体の活動を活性化し、⑥指導層の連携をはかる。

つまり、地域紛争(その多くは内戦)終結後の平和的再建のために、おとなの学習、さまざまな文化・芸術活動を展開しようというのが平和文化のひとつのテーマである。

また、戦争につながる一切の暴力文化、アメリカ等の大都市で深刻化している暴力をなくして、い

のちと人権の尊重を基本とする文化を創造していくことも、平和文化のテーマである。

これらの目的のためには、従来主として、小・中・高校でおこなわれていた平和教育(それが今後重要であることに変わりはないが)だけでは不十分で、あらゆる非暴力をめざした成人教育、文化活動を発展させようとしている。

第五福竜丸展示館のような、平和博物館にユネスコ関係者が注目し、国際平和博物館会議が開催されるようになったのも、平和文化発展のためである(来年には日本で開催)。

日本では、戦争を拒否し、核兵器を否定する世論は強い。それは、五〇年前に施行された日本国憲法と、戦後の平和運動による。

にもかかわらず、暴力文化は、テレビ、漫画、テレビ・ゲーム等でははんらんしている。ソフトの大量輸出をして、世界のひとびとのひんしゅくを買っている。これらの暴力プログラムが、子どもと青

年のいじめ・暴力を誘発する契機となっている。かつては暴力番組と暴力行為の間には相関性がないと主張する専門家がかなりいたが、もはや、このようなことをいう人は少数である。

平和文化とは、不利な人びとへの共感と連帯感を育て、生命と人権の尊重にもとづく平和な世界をつくる文化であるとわたしは思う。

戦争から、日常的な暴力・いじめまで、いっさいの暴力を否定し、平和文化を育てるさまざまな活動、さまざまな施設の拡大発展を心がねがい、努力したいと思う。



(立正大学教授・協会理事)

### 不戦憲法下の主権者として 沖繩の状況にNOを!

島 田 信 子

「日米安保条約は、わが国安全保障の根幹であり、わが国存立の基盤である。」といいきり、「海兵隊の削減は求めない。」ときっぱり断言した橋本首相。

神妙な面持ちを見せて「沖繩の皆さんの痛みを深く受けとめ、削減に努力する。」と約してきた態度を一転。それはまさしく、沖繩に背を向けワシントンへの忠僕ぶりを見せつけた表明であり、案の定ポーズはポーズの域を出ないまま、更なる差別的助長につながる駐留軍用地特別措置法(特措法)の改悪に踏みきました。

国会で特別委員会がはじまる前日、突如まいこんだ発行所「株式会社今週の日本からの」に「つぼんNOW」は、A3版の4頁全面で「日米安保と沖繩問題」を特集。「日本およびアジア・太平洋の平和と安全に」を掲げた見出しの中には、「わが国だけでなくアジア・太平洋地域の平和と安全を目指す

のであり、そのためには在日米軍基地の安定的な使用が確保されていなければなりません。その意味で、沖繩に米軍基地が存在する意義は大きいのです。」と、お定まりの文句がわずか八行並ぶのみです。

聞くところによると、総理府広報室と首相官邸広報とを兼任する編集者が紙面を構成。首相直属のPR紙ともいえるもので、それにもかかわらず在沖駐留米軍の削減は不可能とする根拠と、その現実的な裏づけの説明はどこにも見当りません。

しかも、一方ではわずか〇・二%に過ぎない未契約地主のために法改正は必要となり、絶対的多数の契約地主は協力的であると強調。先祖伝来の生産と生活の場を、文字通り銃剣とブルトナーで強奪した経緯には一言も触れず、昨秋の県民投票(軍用地主やPTA等も参加)の結果や、県議会をはじめ市町村自治体がこぞって反対

を表明している現状をも無視した紙面づくりです。

そして、最終的に結論づけているのが「沖繩の痛み、国民全体で分かち合うことが大切」と、橋本首相自身が、本土の沖繩化と、より財政負担の増大を、言外に求めています。

すでに、条約上の義務をはるかに上回る「思いやり予算」をまかり通せている上に、有名無実と化したまやかしの「事前協議」との空手形を口実に、歯止めなき運命共同体のルールを迫りつつある中で、政党間工作で法案成立の目的を得た首相は、「条約上の義務は履行しなければならぬ。」と胸を張りました。

米国と軍事同盟を結んでいる国々で、基地を提供している国はごくわずか。同盟イコール基地提供と思いきまされる理由はなく、米国からの要求を、鶴の一声と無制限に受け入れる姿勢こそが問われるべきでしょう。

何よりも問題にすべきは、日米安保条約がこれまで何をしてくて、これから何をしようとしているのか。東西冷戦時代の、ソ連脅威論の大合唱を北朝鮮に置き替え、本来は日本を防衛する目的などでは

なく、米国自身が固執する覇権主義にもとづく世界戦略に、ひたすらイエスマンで従っているのではないのか。

それとも、軍産複合体が常套手段とする仮想敵仕立てに便乗し、かつての朝鮮特需、ベトナム特需、そして湾岸戦争後のアジアで急激に展開されたあの武器市場など、殺戮と破壊を伴って手にする経済的おこぼれを、どこかで待つ、浅ましくも怖るべき意識が、皆無と

いられるのか。保守党議員が口にする「国益」という言葉を、危惧なしに聞くことができないのは私のみでしょうか。

そうでなければ、大戦後の国際社会で信頼を取り戻し、迎え入れられた最大の価値、不戦を誓った平和憲法を易々と踏みこむような状況が平然と受け入れていられる筈があるでしょうか。

日米安保条約の下で、間接的な加担をまぬがれ得なかつたベトナム戦争、湾岸戦争。不戦憲法の下での主権者でありつづけるために、私はハンカチ一枚といわれようと一坪反戦の列にありつづけたと思います。

(草の実会平和問題研究部)